

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 2 日現在

機関番号：14503

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06406

研究課題名(和文) オランダにおける市民性教育の教育方法学的研究

研究課題名(英文) Studies of Citizenship Education in the Netherlands from a Perspective of Educational Methodology

研究代表者

奥村 好美 (Okumura, Yoshimi)

兵庫教育大学・学校教育研究科・講師

研究者番号：30758991

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、オランダにおけるピースフルスクールプログラムの理論と実践、およびその教育の質を維持・改善させるための取り組みを検討した。ピースフルスクールプログラムとは、民主的な市民性育成を目指す教育プログラムである。主要な成果は、ピースフルスクールプログラムの具体的なカリキュラムの特徴を整理したこと、ピースフルスクールプログラムの教育の質の維持・改善に向けた取り組みの探究を行い、学校改善の鍵を示したことである。

研究成果の概要(英文)：This research examined the theory and practice of the peaceful school program in the Netherlands and analyzed the approach for quality assurance and improvement of the program. The peaceful school program is an educational program for democratic citizenship. The main findings of this research were 1) to elaborate the characteristics of the peaceful school curriculum and 2) to suggest keys for quality assurance and improvement of the program.

研究分野：社会科学

キーワード：オランダの教育 ピースフルスクール 市民性教育 教育方法学 教育評価

1. 研究開始当初の背景

市民性教育とは、1990年代以降日本を含む各国の教育改革において注目され、実践されるようになった教育活動である。シチズンシップ教育とも呼ばれ「国家や地域の共同社会の形成者をいかなる意味内容をもって育成してゆくのか、という重要な課題を担う」教育活動であるといえる(嶺井明子編『世界のシチズンシップ教育 グローバル時代の国民/市民形成』東信堂、2007年、p.)。グローバル化や情報化が進むめまぐるしい社会の中で、他者と協力しつつ、その変化に対応したり、解決策のない諸問題の解決に取り組んだりするために、市民性教育はますます重要になってくると想定された。

日本における市民性教育についての研究は、イギリスなどを中心に行われてきた。しかしながら、研究代表者は、オランダのピースフルスクールプログラムと呼ばれる市民性教育のプログラムに着目した。これは、オランダの約1割の初等学校で取り入れられている社会的コンピテンシーや民主的な市民性を育成するプログラムである。ニューヨークで開発された衝突を解決するプログラムをもとに、オランダ版として、ユトレヒト大学のデ・ヴィンター(de Winter, M.)教授のもと開発されたものである。このプログラムを導入した学校はピースフルスクール(オランダ語で Vreedzame School)と呼ばれる。研究代表者がこのプログラムに着目した理由は、ピースフルスクールでは、授業だけでなく、学校全体・学校外にも開かれた形で取り組みが行われていること、ピースフルスクールの教育の質を維持・改善できるような取り組みが意識的に位置付けられていることである。

こうしたオランダのピースフルスクールプログラムはその重要性が認められ、当時すでに日本にも紹介されていた(リヒテルズ直子『オランダの共生教育-学校が<公共心>を育てる』平凡社、2010年など)。そして、佐賀県武雄市等では日本版にアレンジした取り組みも行われてきていた(熊平美香「教育と学習のイノベーションを探る(10)日本でのピースフルスクールプログラムの取り組み-佐賀県武雄市立武内小学校でのケース」『文部科学教育通信』第350号、2014年、pp.26-28など)。ただし、オランダのピースフルスクールプログラムの理論・実践研究や質の維持・改善の方策等まで視野に入れた詳細な検討は十分であるとは言えなかった。

そこで、オランダにおけるピースフルスクールの理論と実践、およびその教育の質を維持・改善させるための取り組みを検討することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、次の2つである。

(1) 授業だけにとどまらず、学校全体での取

り組みや地域社会との連携といった広い視点を有する新たな市民性教育の在り方について、理論・実践両方の側面からオランダのピースフルスクールプログラムを探究することである。

(2) オランダのピースフルスクールプログラムの質の維持・改善に向けた取り組みを検討することで、学校全体・学校外にも開かれた形で子どもたちの市民性を育む教育の質を保つための方策を見出すことである。

3. 研究の方法

本研究では、理論と実践の往還を重視した教育方法学的アプローチを用いて研究課題に迫った。具体的には、下記のような方法で研究を進めた。

(1) オランダで収集した一次資料に基づく文献調査

研究期間中、2度にわたりオランダを訪問し、ピースフルスクールプログラムの創立者とされるパウ氏(Pauw, L.)の著作、さらにパウ氏が手がけるピースフルスクールプログラムの指導書等を収集した。これらの収集資料をもとに文献調査を行った。これにより、ピースフルスクールのカリキュラムの特徴を理論的に整理し、検討するとともに、推奨されている質の維持・改善の方策を探った。

(2) オランダでのインタビュー調査とフィールド調査

ピースフルスクールプログラムの実態をより具体的に明らかにするために、創立者とされるパウ氏(Pauw, L.)に、2016年3月18日にパウ氏の自宅でインタビュー調査を行った。またオランダの代表的なピースフルスクールを訪問し、フィールド調査を行った。具体的には、2016年3月14日に初等学校である OBS Overvecht 校と中等学校である Trajectum - College 校を、2017年3月14日に再度 OBS Overvecht 校を訪問した。ピースフルスクールプログラムは初等学校向けのプログラムであるが、Trajectum - College 校は現在開発中の中等教育向けのプログラムのパイロットスクールであった。これらの学校での調査により、ピースフルスクールの教育実践および、現場での質の維持・改善の在り方の現状を探った。

これらの方法で検討を進めることと並行して、将来的に日本の学校教育の場で研究成果を生かすことを念頭におき、日本における市民性教育の理論・実践事例についても調査を行った。

4. 研究成果

本研究の成果は、主に次の2点に整理できる。

(1) 理論・実践研究を通じたピースフルスクールのカリキュラムの特徴の具体的整理
ピースフルスクールのカリキュラムの特徴は、次の3つに整理できる。1つめは、週に一度ピースフルレッスンという授業が組み込まれていることである。授業は年間で6つのブロックに分けられており、テーマは全学年で共通している。6つのブロックとは、次の通りである。

お互いにクラスの1員である(クラスの雰囲気形成)

自分たちで衝突を解決する

お互いに分かり合う(コミュニケーション)

お互いに心を持っている(感情)

仲裁の仕方を学ぶ(責任)

私たちはみんな違う(多様性)

低学年から高学年に至るまで、発達段階に合わせて、毎年同じテーマを少しずつ深めていく形で学べるようカリキュラムが組まれている。

2つめは、子どもたちの間の衝突を仲裁するメディエーター(けんかの仲裁をする人)と呼ばれる児童が育成されることである。ピースフルスクールでは、高学年である7・8年生のうち希望者が学外で研修を受け、メディエーターの資格を取る。そして、学校で子どもたちがけんかをしていたら、先生がすぐに仲裁に入るのではなく、まずけんかの当事者同士が仲直りをしようとし、それでも仲直りができなければ、次に高学年の児童であるメディエーターが仲裁に入る。これにより、子ども同士での日常的な衝突などの問題解決が図られる。

3つめは、子どもたちに育みたい市民性を教職員自ら、さらには地域の方や保護者にも実現しようとするすることである。この背景には、パウ氏が、学校内でメディエーターとして活躍していた子どもが学校外で全く民主主義的ではない振る舞いをしているのを見てショックを受けたことがあるという。この経験から、パウ氏は学校内に限定した取り組みではなく、地域ぐるみで民主主義的な文化を形成することの重要性を感じたと述べる。実際、子どもと関わる機会が多い地域住民や保護者が研修を受けることもある。

以上より、学校全体で学年を超えた長期的な見通しがあり、学校外の地域住民や保護者を巻き込んだ形でカリキュラムが構成されていることが明らかとなった。

(2) ピースフルスクールプログラムの質の維持・改善に向けた取り組みの探究

質の維持・改善の取り組みとしては、主に次の3つの取り組みが中心となるといった。1つめは、プログラム導入時での質の維持・改善である。学校がピースフルスクールプログラムを導入する際には、2年もしくは3年といった時間をかけて、学校内に設置された

教職員からなる運営委員会を中心に進められる。教師たち自らが中心となって、教員研修会、保護者会、授業訪問といった場が設定される。単にプログラムの教材を導入するといったことを超えて、学校が自らの力で学校改革を進めていけるようになることが目指されている。学校内外に民主主義的な社会を構築し、教師たちが自主的・共働的に質の維持・改善を行えるような文化を形成することが目指されているといえた。

2つめは、学校レベルでの質の維持・改善の取り組みである。学校が、ピースフルスクールとなると、ピースフルスクールとしての質を管理するための評価指標などを活用することができるようになってきている。評価指標には、例えば、教師、可視性と普及、参加、組織における定着、親といったテーマが含まれている。そこでは、教師自身に市民性が育まれているかや、ピースフルスクールとしての取り組みが、学校の教育環境などを含め、組織全体で形成・維持されているかといった点が問われる。

3つめは、授業レベルでの質の維持・改善の取り組みである。ピースフルスクールでは、授業レベルの質を管理するための評価指標もしばしば用いられる。研究代表者がフィールドワークを行った学校では、特に新任教員を中心として授業訪問などを行い、質の維持・改善に貢献する役割を果たすトレーナーが存在していた。トレーナーは、ピースフルレッスンだけでなく、国語や算数といった教科の授業においても授業訪問などを行う。

ピースフルレッスンについては、トレーナーが各教員の授業を訪問し、授業レベルの評価指標を用いて評価を行っていた。授業訪問時には、それぞれの評価指標にチェックがつけられ、課題がある評価指標にはコメントがつけられていた。コメントは、授業者が現在行っていることを具体的に上げ、そうした行為をもっとできるようにといった肯定的な形で記されていた。そして、それにもとづき、トレーナーと授業者は話し合いを行うことで、質の維持・改善を図っていた。ただし、トレーナーは、「授業だけではダメなのよ。学校全体の文化が最も大切なのよ」とインタビューで語っており、授業レベルとともに学校レベルの質の維持・改善活動を実施することの重要性を指摘していた。

このように、以上3つの取り組みは、3つ合わせてピースフルスクールとしての質の維持・改善につながっていた。こうした取り組みでは、特定のテストなどの限定的な側面に焦点を当てて短期的・直接的に改善しようとするのではなく、長期的に学校文化そのものを改革していくといった視点が鍵となっていた。このような学校改善のあり方はピースフルスクールだけに限らず、参考になると考えられた。

以上のような成果については、研究論文や

書籍においてまとめるとともに、学会発表を通じて発表・公開した。

さらに、これらの成果を将来的に日本の学校教育の場で活かすことを目指して、ピースフルスクールについて兵庫教育大学の授業で取り上げ、メディエーターが仲裁に入り衝突解決する場面をロールプレイで体験する授業を実施した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

奥村好美「オランダにおける市民性教育を通じた学校改善 ピースフルスクールプログラムに焦点を当てて」教育目標・評価学会編『教育目標・評価学会紀要』第26号、2016年、pp.21-30(査読あり)

〔学会発表〕(計2件)

奥村好美「オランダにおける市民性教育を通じた学校改善 ピースフルスクールプログラムに焦点を当てて」日本カリキュラム学会、第27回大会、自由研究発表、2016年7月3日、香川大学

奥村好美「オランダの学校評価と学校改善から学ぶ 豊かな学びと学校の多様性の視点から」日本カリキュラム学会、第8回研究集会、2017年3月5日、お茶の水女子大学

〔図書〕(計2件)

奥村好美『<教育の自由>と学校評価-現代オランダの模索-』京都大学学術出版会、2016年(総ページ数:295)

奥村好美「オランダのカリキュラム」田中耕治編著『よくわかる教育課程 改訂新版』ミネルヴァ書房、2017年出版予定

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥村 好美(OKUMURA YOSHIMI)
兵庫教育大学・学校教育研究科・講師
研究者番号：30758991